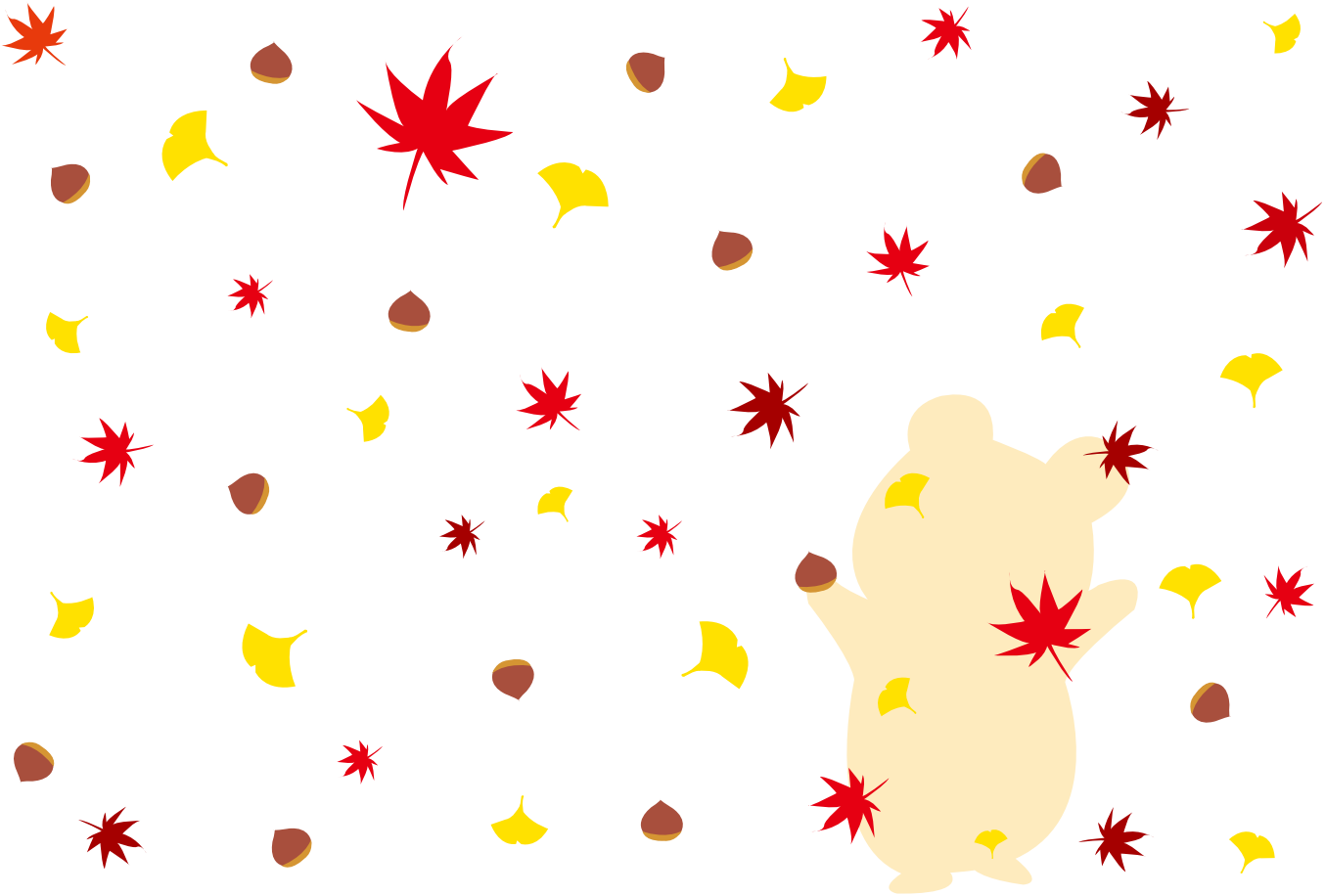
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2018年11月　NO.206



［もくじ］

2～3　音楽活動と少し裏話③－プロデューサー大石さん－…宮地克也
4～5　これまで…西岡舞
6～7　ゴトゴトシネマがゆく…前田誠一
8～9　突然主催者になる…Kannon
10　「アンテナ」よさこいチームM・Ｉとの出会い…下尾仁
11　第68回高知市夏季大学
12～13　高知市文化振興事業団８月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：『すっかり秋ですね。』中田　隆也

公益財団法人高知市文化振興事業団

音楽活動と少し裏話③
―プロデューサー大石さん―

宮地　克也

【ラジオデビュー】

前号に出てきたラジオ出演をかけた公開収録の後、プロデューサーの大石さんに声をかけられ、別室に案内されました。

挨拶する間もなく「君ら意外と、訴える系やねんな」「訴える系ですか。そんな風に考えたことなかったんですけど」「いやいや、ええと思うで。今時珍しいんちゃう。地元どこなん?」「君ら、ラジオやってみいひん? 今ちょうどパーソナリティー探してて」と。別室に呼び出され三十分、何がどうなっているのか分からないままの急展開。詳細を教えて貰い、返事は後日にしました。その後も、ラジオというメディア、音楽業界、奥さんや仕事の話など貴重な話をしてくれました。

後日、スタジオの見学に行き番組制作の様子を見て、面白さにのめり込み、千葉のFMうらやすで週に一度、三十分のGRoundの冠番組がスタートしました。初回は緊張しすぎて何を喋ったかも思い出せないけど、回を重ねるごとにラジオの楽しさにハマり、収録に向けてネタを考え、お便りを募集し、ディレクターと構成を考えたり、充実した経験をつみました。

【プロデュースと価値】

初めてバンド形式で行ったライブの後、意を決して大石さんに「僕たちをプロデュースしてくれませんか?」と伝えました。もっと本気で、音楽で生活できるようになりたくて、仕事としてプロデューサーの大石さんに話しかけたが、返答は予想と違って「ちょっと考えさせて。時間ちょうだい」でした。一週間後、改めて大石さんから言われた内容は、今でも仕事の基本になっています。

「君らをプロデュースして、売れることを真剣に考えてみてん。結論から言うと、このままじゃ無理やねん。この前渋谷のライブに行かせてもろうてお客さん沢山入ってたけど、あの人達が君らのファンかというと、そうじゃないと思うねん。大半は、君らの人柄とか付き合いとか、そういう所で君らを好いてくれてるんやと思うけど、そういうのじゃなくて、純粋に音楽の力が必要やねん。申し訳ないけど今の君らの音楽では人を動かすことは出来ひん。そういうレベルに達していない。何が売れるかは誰にも分からんけど、絶対アカンというものは分かる。君らは今のままでは絶対に売れない。それは分かる。例えば、沢山の人に聞いてもらいたくて一生懸命ライブしてCDを売る。やけどな、それがほんまにいいモノやったり、頂くお金以上の価値があるモノでなければ、実はファンを得ているのではなく失ってんねん。誰も面と向かって正直な事なんか言わへん。だから、水面下でファンを失っても気付かへん。自分が誰かのライブに行ったりCDを買ったりして、それが素晴らしいものでなかったら二度と行かへんし買わへんやろ。名前見たって、あのバンドか、見んでええわってなるやろ。今の君らはそういう状態で、やればやるほどファンを失ってる。だから、ミュージシャンはこれだというものが形になって表現できるまで、お金をとってライブをすべきでないと僕は思うねん。そういう意味で言うと、君たちはもうフ

ァンを失い過ぎてる。何も無いところから始めて、誰も知らん土地に来て、たくさん人が来てくれて、めっちゃ凄い事やけど、僕がプロデュースするのは仕事やから。仕事っていう事はそれでお金を稼いで生活していく事やから。ミュージシャンやったらミュージシャンとしての力、店やったら商品の力、そういう勝負できる力がいるねん。その力が無いことには、なんぼ上手くやったって通用せえへん」。

目から鱗だった。価値というものをそこまで真剣に考えたことがなかった。なるほど…とボーっとしていると、大石さんはこう続けた。「訴えるとか、伝えるっていう方向を徹底したらひょっとしたらほんの少しの可能性やけど上手くいくかもしれへん。カッコつけたらあかんで。どこまでも泥臭く、必死に、人間臭く、正直に本気で一心不乱にやってる姿が君らの唯一の武器やねん。ほんで、真剣に僕がプロデュースするなら、ええ曲作って、ええ音源作って、しばらくライブはせずに練習して、路上ライブしながら一からやろう。次に出る時は皆に衝撃を与えなあかん。まずは曲。ええ曲が出来たら僕が仕事してるアレンジャー紹介してあげる。一緒にレコーディング行こや。せやから、まずは二曲、来週までにいいの作ってデモを頂戴。それでええか？」と。三人とも大石さんの言う通りだと心底納得し、沢山のお客さんが来てくれる次のライブは、今後の為にも経験しておきたい、活動休止の宣言はその日にさせてほしいという頼みを受け入れてもらいこの件を進めることにした。

【その後】

ヒラノ君の脱退を経て、ヒゲンジッシュギの活動を開始しましたが、〝価値〟についてはよく考えます。技術の進歩により音楽をするのに場所を選ばなくなり、近い将来、ＡＩがシチュエーションに合った名曲を作ることが可能になると僕は思っているので、これからは価値を創造できる様になりたいと思っています。

最後に、大石さんがベストアルバムに寄せてくれた文章を引用します。

（以下ヒゲンジッシュギ二枚組ベストアルバム『光と影』より引用）

ヒゲンジッシュギのＣＤ発売について思う事

私が「このＣＤに何を書いても全く効果ないよ。僕は全く有名でないから」と宮地くんに言ったにも関わらず書いてくれというのでイヤイヤ書く事にした。

彼との出会いは五年程前である。私が担当していたラジオの公開収録ＬＩＶＥで彼に出演してもらったのがきっかけだ。

本当に歌が下手くそで私の中では歌が下手くそな宮地だ。音楽も全く売れる音楽を無視し歌詞もなんだか病んでる歌詞で本当にブサイクな音楽だった。かわいそうにこんな歌で売れると思って東京まで出て来て。絶対に売れないのに…それが彼らの第一印象だ。今もそれは全く変わってないが…。

そうです、彼らの歌は絶対に売れません。逆に言えば売れない歌をずっとここまで歌ってきて人生はもう終わっています。という事は、もう歌を一生歌うしかないんだ宮地くんは…本当につくづくかわいそうな男である。

そんな可哀想な男が売れることが無いＣＤを命をかけて作ったらしい。それがこの二枚組ＣＤ。これを読んだ人はこのＣＤを買ったという事だと思う。無駄金を使ったわけです。

ただ１つだけ忘れないでほしいのは、本来〝歌〟とはこの様な、何の取り柄も才能もない人間に残されたお金のかからない唯一の娯楽なのです。奴隷にされた黒人には歌しか無かったように。

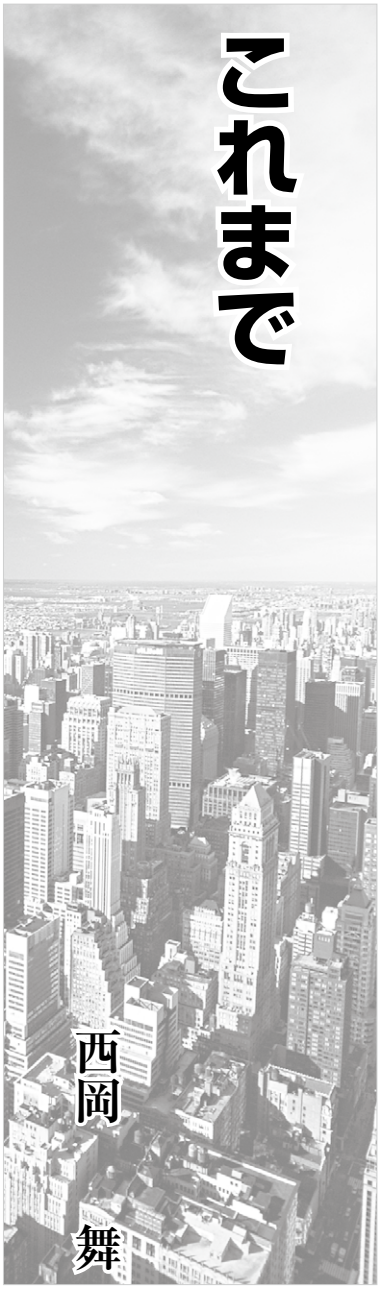
彼には何もない、だから歌うしかない。本当に可哀想な男です。宮地くんよ、普通の生活がしたいなんて求める時が来ない事を心から祈っています。

名もない大石より

みやじ　かつや

一九八四年生まれ、大月町出身。大月町役場を退職後ミュージシャンに転向。現在はヒゲンジッシュギのボーカルとして活動中。

これまで



西岡　舞

「わたし、これになる！」その直感を信じて生きてきて十何年。やっとアメリカで舞台に立つことができました。

現在、ニューヨークを拠点にミュージカル女優として活動しています、西岡舞と申します。アメリカ生活はもうすぐ五年になります。これまで、『コーラスライン』『ミス・サイゴン』その他ミュージカルやコンサート等に出演してきました。

香美市土佐山田町に生まれ、音楽、特に歌とダンスが大好きで、アイドルの真似をしてみたり、お風呂場で歌ったり、歌手になりたいと密かに思っていました。が、まさか本当に仕事にするなんて、ましてやニューヨークなんて自分でも驚いています。

人生の転機は中学三年生、劇団四季のミュージカル『はだかの王様』でした。大きな拍手、ライトを浴びてキラキラと輝くダンサーのお姉さん、歌を歌う出演者たちの顔。これだ！胸にバシッ！と響きました。わたしもこの中の一員になりたい、歌いたい。わたしも輝きたい!!「わたし、これやる!!」そう心の中で強く思いました。

思い立ったらすぐ行動の私。その日からミュージカルの道まっしぐら、バレエと声楽のレッスンに通い始めました。もちろん親はミュージカルなんて知りもしません。しかも、ミュージカルを見るまでは、医者になると言っていましたし、いい大学に入ることを期待されていたので、ミュージカル女優になる、と言った時、何が起こった!? という感じで、反対されました。が、言い出したら聞かない私。どうにか説得、いやほとんど無理やり納得してもらいました。今でも、いい大学に入れておけば良かったと後悔されます。

大学は「本気でやるなら一流から学ぶべき」という姉の助言で、東京のミュージカルコースのある音楽大学に入学し、四年間でミュージカルに必要なほとんどを学びました。毎日が楽しくて楽しくて。「歌もダンスも基本は芝居。気持ちが大事。気持ちがあるから歌う。声になる。動きになる」この教えは今でも私のモットーになっています。

卒業後二年間は、ディズニーへ所属しました。それも、友人と遊びに行き、パレードを見た時に「これがやりたい！」と思ったことがきっかけです。とにかくやりたい！と思ったことはやらないと気が済まない、そして先を考える前に行動する性格で、ニューヨークへ行くきっかけも同じでした。姉とのニューヨーク旅行中、ふと「私ここにいるかも。多分私、ここに住むな」と思い、日本に帰ってすぐに、ニューヨークへ移り住むための資料を探し、会社に辞めることを告げ、その半年後、二〇一四年七月にニューヨークへ発ちました。

ミュージカルの本場、ブロードウェイ。その舞台は私に思わぬ衝撃を与えました。役者が演じている、のではなく、生きてる。本物だ。これが私が求めているものだ！と思いました。

「こんな芝居がしたい！」と、勢いで来たニューヨークですが、辛かった。本当に辛かった。舞台に立つまでの道のりは、想像をはるかに超えるものでした。

まずは言葉。一番嫌いだった勉強が英語でしたから、もちろんまったくしゃべれませんでした。何を言っているか聞き取れない。レッスンに行ってももちろん、英語。

先生の言っていることがわからなくて、さらに、教えて欲しいと伝える英語も知らなくて。勇気もなくて。パニックになって、まったく英語が出てこなくなる。せっかくのニューヨークだからと、様々なジャンルのレッスンにも通いましたがそれも失敗の原因になったのだと思います。

食も合わない、生活スタイルもまったく違う。病気になったり、生活することだけで必死でした。何をやってもうまくいかない、どんどん自信をなくしていました。SNS上では友人がどんどん舞台に立っている写真を目にしては僻んだり、家族には「ニューヨーク楽しい！ 頑張ってるよ！ うまくいっている」とうそをつき、相談できる人もいない。一体自分が何をやりたいのかわからなくなりました。そんな生活が続いた一年半後の冬。「もう諦めて帰ろうかな」と本気で考えました。今までどんなことがあっても笑顔で乗り越えてこれましたが、その時だけはどうにもできなかった。辛くて、逃げたくて仕方なかった。こんな自分じゃなかったと思い、自分のことが大嫌いでした。

© Robert Anthony Terrano 2016

そこから救ってくれたのは、「本当は何がしたいの？」という言葉でした。考えました。何がしたいのか。何の舞台に立ちたいのか。そして自分の生活を見直し、通っていたレッスンもミュージカルに近づくものだけにしました。

すると、全ての流れが変わりました。素晴らしい先生に出会い、必死で練習を重ね、見事、初めてのアメリカでのオーディションに合格しました。

もちろん、セリフも歌も全部英語です。オーディションで役を取れるか取れないか、重要なのは発音です。アメリカ人が聞いて、聞き取れなかったり、日本人アクセントがあったらアウト。いかに、ネイティブに近づけるか。発音のレッスンに毎日通い、映像で口の形を見ては真似し、舌の動きを研究し、言葉一つ一つをチェック。それはもう気の遠くなるような練習でしたが、楽しかった。夢にまで出てきていました。

発音をクリアしたら、表現として見せる。オーディションは人生で味わったことのないほど緊張しました。合格してからも大変でした。大勢のアメリカ人の中に私一人だけ日本人。稽古中も指示は英語。共演者たちの会話も英語でどんどん進んでいきます。その期間で相当英語は鍛えられましたね。

辛い頃を乗り越え、努力の上で初めてアメリカでたった舞台『コーラスライン』では舞台上で号泣でした。諦めなくてよかった。やっと、生きてると感じられました。

これまで起こった辛いこと、楽しいこと、全てには意味があったと思います。辛い時期があったから、そこに戻りたくないと、必死になって練習をしました。あの時諦めなかったから、時間はかかったけれども結果として現れた。辛いこともたくさんあります。でも、自分の選んだ道はこれでよかったと感じています。そして、自分の好きなことをさせてくれている家族に感謝をしています。

まだまだ、夢の実現の途中です。次の夢は、ツアーのカンパニーに入って、ミュージカルをしながら世界中を回ることです。日本にも舞台の一員として戻ってきたいです。そしていつか、高知でミュージカル公演ができたらいいなと思っています。

にしおか　まい

一九九〇年生まれ。香美市出身。ミュージカル女優。昭和音楽大学ミュージカル学部を特別優秀賞で卒業後、某有名テーマパークに二年間所属。日本でFame（カルメン）、Sound of Music（ブリギッタ）、ねこはしる（主役・ラン）、賢者の贈り物、等の舞台に出演。二〇一四年に渡米。現在アメリカ・ニューヨークを拠点に、ミュージカル女優としてコーラスライン（コニー）、ミス・サイゴン、ジーザス・クライスト＝スーパースターや、その他オリジナルミュージカルに出演する他、世界的に有名なカーネギー・ホールにもシンガーとして出演する等活動の場を広げている。

ゴトゴトシネマがゆく

前田　誠一

■土佐山生まれの移動映画館

ゴトゴトシネマは、高知市土佐山桑尾地区に住む我々・前田ファミリーが運営している自主上映団体、というか家族です。名前は、当地桑尾にある県内最大のスピリュアルスポット・ゴトゴト石に由来しています。もともとは地域にある桑尾公民館を使って何か賑わいが起こせないかなと思って企画し、二〇一四年の十二月から月一で上映を開始したのが始まりです。その後、自分の映画熱が高まり、またお客さんからのリクエストもあり、新しい映画も上映したいな、ということで、配給料を払える集客が見込める高知市の中心地に上映場所を移し、二〇一六年三月から月一でお山を降りて上映活動を行うようになりました。

とあっさり語りましたが、ゴトゴトシネマの黎明期については、もっと深い話がたくさんありますので、ご興味のある方はぜひゴトゴトシネマホームページから「ゴトゴト通信」というページをクリックして過去の発行物をご覧ください。

１周年は桑尾公民館で８本立てのＦＥＳを開催

■ジャンルは音楽、食、農、民族、社会派ドキュメンタリーから猫まで

自分が今見たい作品で、高知にやってこないものを選んで上映していますので、実はジャンルにこだわりはないのですが、これまでに上映してきた作品を紐解きますと、まず「音楽もの」。これはゴトゴトの大きな特徴になっているかと思います。

高知市中心地での最初の上映作品『スーパーローカルヒーロー』もそうでしたし、ブエナビスタ以降のキューバジャズシーンを描いた『キューバップ』、以前から興味のあったジプシーの芸能を描いた『ジプシー・フラメンコ』、子どもの頃から好きだったジャニスジョプリンの『ジャニス：リトル・ガール・ブルー』、アイヌの姉妹デュオ『カピウとアパッポ』、日本ではほとんど上映されていないが世界的には数々の賞を受賞した『遊牧のチャラパルタ』、最近ではアメリカのけったいなレコードマニアに密着した『さすらいのレコード・コレクター』という地味に傑作な音楽ドキュメンタリーも上映しました。音楽系の作品は、マニアックでなかなか高知にやってこないので、これからもゴトゴトの主軸になるものと思っています。

続いて私たち夫婦が東京で「大地を守る会」というオーガニック系の会社で働いていた関係もあり、「食、農、環境もの」。これには強い関心があります。作品で言うとファッション産業の闇を描いた『ザ・トゥルー・コスト』、地球温暖化問題を追った傑作『ビューティフルアイランズ』、食べ物から命の尊さを学ぶ『カレーライスを一から作る』、砂糖の過剰摂取を世に問うた『シュガー・ブルース』、福島第一原発事故で汚染された畜産牛を守る『被ばく牛と生きる』などなど。食、農、環境関係の映画もゴトゴトラインナップ

には欠かせません。

また、なるべく多くの方が楽しく生きていける世の中の方がいいにきまってますので、「社会派」と呼ばれる映画も好んで上映しています。移民問題を描いた『バベルの学校』、知的障害者施設の素敵な活動に密着した『幸福は日々の中に。』、聴覚障害者が自分たちで〝音〟を表現した無音の六十分『LISTEN』、ネパール地震後の復興を描いた『世界でいちばん美しい村』、冤罪被害者を追った『獄友』など。これらの映画をきっかけに、今まであまり知られていなかった人たちのことを考え、思いを寄せるきっかけになってくれればいいなと思っています。

毎月定期上映を行っている帯屋町の喫茶メフィストフェレス２Ｆシアター

後はですね、「音楽もの」に近いのですが、自分が若かりしころ文化人類学を学んでいたので、「民俗もの」にも興味があり、沖縄・久高島の秘祭「イザイホー」や、五十年前の世界の民族文化を映像に残した「ECフィルム」のゴトゴトシネマセレクションなんかも上映し、好評を博しています。

そうそう、忘れてはいけません。「猫もの」もゴトゴトシネマの大きな特徴。一家揃って猫好きなのです。トルコイスタンブールの街猫を追った『猫が教えてくれたこと』、高知初上映の『劇場版　岩合光昭の世界ネコ歩き』は、高知県下の猫好きの皆さんがたくさん来てくれてとっても盛り上がりました。

以上ご紹介した作品はすべてドキュメンタリーなのですが、別にこだわっているわけではなく、今年の九月にはゴトゴトシネマ初のフィクション映画にしてラブストーリーの『心と体と』を上映し、ご好評いただいております。これからもいいフィクションがあったら続々とやっていきたいと思っています。

■上映作品に込めた想い

ちょっと便宜上ジャンル分けしてみましたが、たとえば『ジャニス：リトル・ガール・ブルー』は、いじめの問題にもつながる話であったり、『ビューティフルアイランズ』は、海に沈むと言われるツバルの豊かな音楽、芸能を前面にフューチャーした作品であったりと、それぞれ実はジャンルをまたいだ内容の作品が多くあります。

よく聞かれるので、ちょっと考えたことがあるのですが、私としては、やはり均質化したこの日本の社会が生きづらく思っており、グローバリズムに征服されつつある世界のあり方がよろしくないと思っています。だから、ゴトゴトシネマで上映する映画に関しては、それらのアンチテーゼとなる作品、人間が人間らしく楽しく暮らしていけるための道しるべとなるような作品を上映していきたいと考えています。猫だってそうです。『劇場版　世界ネコ歩き』の岩合光昭さんも言っていました。「猫が幸せになれば人が幸せになり、地球が幸せになると本気で感じています」。私もそう思います。

今後は上映作品のチラシを作れないほどマニアックな作品も登場してくる予定ですので、フェイスブックなどSNSでアカウントのある方はぜひ、ゴトゴトシネマとつながっておいてください。これからも高知にやってこない、いかした映画を続々と上映していきたいと思いますので、皆様ぜひぜひよろしくお願いいたします！

まえだ　せいいち
一九六八年生まれ、高知市在住。ゴトゴトシネマの主宰として、様々なジャンルの映画を市内各所で上映している。

突然主催者になる

Kannon

私は、タロット占いをしています。活躍の場所を広げるためイベント出店したい！という思いが強くなり、まずは行動しなければと思っていたとき、いつもお世話になっているじんぜんじゅカフェへ行くとなにげなくテーブルに置かれていたフリーペーパーが目に入った。なんと、そこにはマルシェの情報が!! まずは電話で問い合わせてみればいいのだが勇気が出ず、もしや友人の知り合いかもと思い、友人に連絡を取ってみたら、世間は狭いもので色々な情報が入ってきた。その情報を元に勇気を出して主催者の方に電話してみたら快く出店させて頂ける事になった。これで初出店が出来るぞ!! 道が開けた。

いよいよ初出店の日、屋外でテントを張り、テーブルとイスのセッティングをし終わり、オープンすると同時に、強風が吹き荒れテントが吹き飛ばされるというハプニングが起きた。強風の中では、タロットカードを広げることは出来ないので、出店することを諦めて知り合いの出店者さんのお手伝いをすることにした。それはそれで楽しかったし、色々な方々と知り合うことが出来た。初めて屋外でのイベントで気付かされたことは、私の場合、風が弱点だということだった。

しばらくして、ある時なにげなくスマホを手に取りInstagram（以下、インスタ）を開くと、イベント出店者募集の画面が目に入った。詳細を見る限りでは占いでの募集は無いのかと諦めてスルーしてしまった。二～三日経ち、やっぱり気になる…。あの募集の画面は何処へ行った、と探すもののなかなか見つからない。これで見つからなければ御縁が無いのだと諦めようと思いながらも検索画面で様々なワードを入力し、インスタの検索機能を駆使し、必死で探したところ、やっと見つけ出すことができた!! その主催者さんに、占いで出店したいと希望してみたら、大丈夫だとのことだったので、何事も聞かずして諦めてしまうのはいけないのだと実感させられてしまった。せっかく道があるのに自分でふさぐことになるところだった。このときは屋内で出店させて頂けるとのことで、私の弱点の風は無い。今度こそチャレンジすることが出来た。これが初出店の第一歩になった。そしてなんと二か月に一回の継続出店が決まった。

何回か出店させて頂いているな

か、突然主催している方が主催を辞めるという話があり、一緒に出店している仲間がザワついた。

あーこれでここでのイベント出店は出来なくなるのかぁ。この先どうしよう…、また出店できるところを探さなければ、誰か引き継ぐ人はいないだろうか…と思っていたが、いや待てよ！ 私がやるしかない！ せっかく道が出来たのに。ピンチはチャンスだ!! と思い直し、私は突然イベントの主催者となった。

モーテマルシェ
×
アプリシエーション

初めて手掛けることに不安は全くなく、楽しみでしかなかった。みんなには「大変で」と言われるけれど、私の中ではただ出店するだけから大きく変わりはしたけれど大変な思いはしていないのだ。出店者を探す時は一番最初のイベントで出会った方との御縁を大切にしていたこともあり、声をかけると集まってくれ、今までの仲間も集まってくれた。人とのつながりは偶然にあったものでなく出会い自体が必然で、つながりを大切にしてきた賜物のように思う。そんな大切な仲間の為にアプリシエーション（感謝、鑑賞、味わう）というグループ名を付けた。アプリシエーションの仲間のおかげもあり、主催者としての第一歩を踏み出した!! 今後もお客様も出店する側も楽しいイベント作りをしていきたい。そして二か月に一回ではなく一か月に一回、イベントを開催し、知名度を上げていく決心もしている。

あの時、イベントの主催者になって続けていく決心が無ければ、今頃どうしていただろう…。そして人生の中で大きく変わったことで、こうやって執筆の機会もでき、人生って面白い!! そんなふうに思っている。

かのん

一九七五年生まれ、高知市在住。タロット占い師。モーテマルシェ×アプリシエーションを毎月第一週目の土日に開催。十時～十六時、モーテ桂浜にて。ハンドメイド、アクセサリー、焼き菓子、ハンドマッサージ、占いなど。

「アンテナ」よさこいチームM・Iとの出会い

下尾　仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。すると、面白いことがやってくる。

皆さんは、よさこい祭りに参加したことはありますか？

今から十五年程前、僕は某よさこいチームで毎年よさこい祭りに参加していた。そのチームは毎年受賞するようなチームで、練習も鳴子の鳴らし方や隊列の綺麗さを意識したり、賞を取るため真面目に練習をしていた。

そして、みんなの士気を高めるため、掛け声は「目指すは金―!!」というようなチームであった。

ある年、踊りの待ち時間の時、他のチームを見ていると、なんとも異様なチームがやってきた。ゴミ袋とダンボールで作っただけのような地方車、踊り子も十～十五人ぐらいで、各々がやりたい放題、壊れたテレビをロープで引っ張り、ただただ進んでいく踊り子、ストッキングを被って引っ張り合いをする踊り子…。僕は、「なんなんだ、このチームは」と思わず釘付けになってしまった。

それまで賞を狙うために真面目に練習をし、本番に挑んできたが、このチームを見て目からウロコが落ちる感じがした。

彼らは、本気でよさこいを楽しみ、一人一人が主役になっていたのである。

そう思ったとき、僕はこのチームのファンになってしまった。チームの名前は知る人ぞ知る「M・I」。僕はこのチームで踊ってみたいと思ったが、自分にはまだ彼らのように自由に表現する事が出来ないと思い、次の年もその次の年もこれまでのチームに参加した。

しかし、賞を取るために踊るというようなよさこいコンテストに疑問を抱き始めていた自分は（もちろん一生懸命練習して賞を取るチームもすごいと思う）、初めてM・Iを見てから五年、ついにチームM・Iの扉を叩いてみた。リーダーは、世界でも活躍する映像作家の大木さんというすごくやさしく気さくな方で、踊り子も県内・県外の芸術家がほとんどであった。

初めて参加するM・I。与えられた振りを踊るのではなく感じたように踊ればいい。だが、それが実に難しい。しかも観客は白い目で見ている（僕はそう思った）。しかししばらく踊っていると、何かに取り憑かれたように体が動く動く。白い目も気にならなくなり、これが「自由は土佐の山間より出づ」、まさに自由である。

それからは、毎年のようにM・Iでよさこいに参加させてもらっている。

ある年は音楽無しという奇抜な発想!! より大きな音で競い合うように爆音を発する地方車が多い中での無音。さすがに音楽無しでは踊りにくいので、前のチームや後ろのチームの音を聞いて踊らせてもらった。

中央公園で踊る時、M・Iの踊りを観客はどういうふうに見ているのだろうと、僕は観客に紛れてM・Iの踊りを見た。観客の反応は、ゲラゲラ笑う人や、早く終わればいいのにと口に出して言う人、様々であった。

もちろん観客の感じ方も自由であっていい。それを間近で見れて面白かった。

沢山のチームが各々のコンセプトで参加し、沢山の踊り子が自分に合ったチームを見つけて参加する。なんでもありの自由な祭り、その中でも自由中の自由、「チームM・I」。

M・Iとは、『〈ま〉と〈む〉のあいだの〈み〉』という事らしいが、まさにそれはアートである。

しもお　ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

第68回高知市夏季大学

平成三十年七月十七日（火）から二十八日（土）まで、日曜日と月曜日を除く十日間、第68回高知市夏季大学を開催しました。

夏季大学は中央公民館事業として一九五一年にスタートしました。「市民の知的開発、文化教養の向上、情操の涵養を図る」という開講当初に掲げられた目的のもと、毎年、経済・科学・政治・芸能・社会・歴史・スポーツなど、各界で活躍する著名人・有識者の皆様にご登壇いただいております。

本年は、例年以上に各種メディアで活躍する皆様に多くご講義いただくことができ、二〇一一年以来、七年ぶりに、さらに発売開始からわずか五日で受講票が完売となり、梅雨明けと共に大変な酷暑となったにも関わらず、たくさんの受講生にご来場いただきました。

初日十七日（火）の講師、東京大学大学院教授の石井直方さんには高齢の方でも効果的に筋力を強化できる筋力トレーニング法「スロートレーニング」について、トレーニング方法を実技も交え、わかりやすく解説していただきました。

十八日（水）は、マルチプランナーの小林さやかさんにご登壇いただきました。「ビリギャル」のモデルとなった小林さんの講演には、大変多くの高校生の来場があり、ご高齢の受講生からは「夏季大学がとても活気づいたようで、大変良かった」というお声もいただきました。

十九日（木）は、カーリング選手の本橋麻里さんに、プロスポーツ選手と家庭を両立するご自身の生き方についてご講演いただきました。ちょうど二〇一八年二月に行われた平昌オリンピックで銅メダルを獲得したこともあり、会場はメダリストを迎えるという独特な熱気を帯びていたことが印象的でした。

二十日（金）の講師は、早稲田大学教授の中林美恵子さんで、アメリカの国家公務員として勤務したご自身の経歴を踏まえ、トランプ大統領就任後大きく変化している現在のアメリカのリアルなお話を聞くことができました。

二十一日（土）は、東京大学教授・宇宙線研究所長で、二〇一五年にノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章さんにご講義いただきました。講演後の質疑応答の時間では受講生からの質問が途切れることが無く、講演全体を通して大変濃密な知の空間が広がっていました。

二十四日（火）は、爆発的なブームとなっている『漫画　君たちはどう生きるか』の漫画家・羽賀翔一さんと、その企画を担った株式会社マガジンハウス取締役編集担当・鉄尾周一さんのお二人から、小説を漫画化するに至った経緯やそのねらいなどのお話を聞きました。講演の中ではライブドローイングやプレゼント企画も実施しました。

二十五日（水）は、将棋棋士、加藤一二三さんにご登壇いただきました。将棋界のレジェンドならではのお話に、会場は時に笑い、時に真剣に、その挑戦を続ける人生のお話に聞き入っていました。

二十六日（木）の講師は、お笑いタレントの中田敦彦さんでした。講演のほか、ご自身からの要望で、急遽来場者全員との握手会を行うなどハプニングもありましたが、高校生を中心に、大変多くの若年層の来場があり、モニター席を含め会場は満席となりました。

二十七日（金）は、脳科学者の中野信子さんにご講演いただきました。脳科学という難しい内容でありながら、大変わかりやすく、そして非常に面白く解説していただきました。また、当日券を購入された方が過去最高を記録するなど、受講生の期待値の高さも窺える講義でした。

最終日、二十八日（土）は、明治大学教授で教育学者の齋藤孝さんにご講演いただきました。コミュニケーションについて、受講生を巻き込んだワークショップ形式で講演を進める時間もあり、予定時間を大きく超えてしまいましたが、大変満足度の高い講演でした。もう一度講演を聞きたいという声が非常に多く寄せられたことも印象的で、齋藤先生にしかできない特別な講演となりました。

会場のアンケートで寄せられた様々なご意見も参考にしながら、来年度以降の講師陣や会場運営など、より充実し、多くの方に参加いただける夏季大学となるよう検討したいと思います。

〈受講者数・延べ八九三〇名〉

8月の事業から

La Baracca「さかさまのお話」

一九七六年、イタリアで一番最初にできた児童劇団「La Baracca」(ラ・バラッカ)。ヨーロッパを中心に子どものための作品を発表し続けている。

『さかさまのお話』は、スロヴェニアやルーマニアのフェスティバルで審査員賞を受賞する等、世界各地で高い評価を受けており、日本では高知が初演となる。

本作は、アンドレアとカルロッタ、二人のイタリア人が一言もしゃべらないで、芝居をする四十分の無言劇。

本番前日、「リハーサル?! 僕たちは何度もこのお芝居をやってるから必要ないよ。本番を楽しみにしてて」と言われ、テクニカルリハーサルのみを終えて、観光に行く二人。言葉がないお芝居に、子ども達は飽きることなく見られるのだろうか…という不安は、開演五分で払拭された。

数種類の音楽、簡単な照明の切り替え、言葉を発しないことの難しさ、それを感じさせない表情と演技。

舞台美術は、大きな紙とペンで用意できるほどシンプルな作りでありながら、想像力をかきたてられるお話し、そして分かりやすい構成。

多くの子どもの笑いを生み、一緒に見ている大人もそれに喜ぶ。観客の反応を楽しみながら、表情を微妙に変えていく演技。観客との絶妙な距離感。

どれもが素晴らしく、ヨーロッパで長年評価され続けているその実力を、見事に魅せてくれました。

終演後、出演者であるアンドレアは、今回の感想を語ってくれました。

「僕は、背が高くて体も大きく、ひげもたくさんだから、恐がれられることが多いんだ。

最初は、なんだこの大きい外国人はっていう目で、彼ら(日本人の子ども達)は僕を見てくる。けど、今回やってみて、僕は、日本人の子どもを大好きになったよ。

僕らが登場した時には、彼ら(日本人の子ども達)との間には大きな壁があったんだ。でも、僕が演技を始めると、その壁を一つひとつ壊していき、彼らの方からどんどん近寄って来てくれた。最後には、フレンドになれた。演じていて、すごくおもしろかったよ」。

日本食や日本のアニメ、日本文化に国民性、とにかく日本が大好きなアンドレアとカルロッタ、「次来た時は神戸牛が食べたいよ」と言って、次の地へ向かいました。

アンケートより

・子ども達が使う紙と絵の具でこんなに素敵なステージができるなんて、言葉がなくても子どももよく分かっていて、登場したネコも実物みたいで、とても感動しました。

・言葉がなくても言葉以上の気持ちが伝わってきて、風や街や川も感じられ、大人でも充分楽しめた。

・子どもが舞台に引き込まれていた。舞台の作り方、演技力の高さ、すごく良かった。

開催日時　二〇一八年八月二日(木)
会場　高知市文化プラザかるぽーと小ホール
入場者数　一回目七十五名、二回目七十九名

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul(カル)ちゃーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう!

特典　①年間1公演招待　②公演チケットの割引販売　③横山隆一記念まんが館企画展招待　④「文化高知」の送付

会費　1年間3,000円(4月1日〜3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

「サンクトペテルブルグ国立舞台サーカス」

二〇一八年八月一五日（水）、高知市文化プラザかるぽーと大ホールにて、「サンクトペテルブルグ国立舞台サーカス」公演を開催しました。

このサーカス団は旧レニングラード国立舞台サーカスとして一九九一年に来日して以来、何度も全国各地を回り日本では親しまれていますが、高知での公演は初めてです。

テントでの興業でなく、ホールのステージで行う「舞台」サーカスは耳慣れないとあって、来場者もかるぽーとでどうやって空中ブランコ？と幕が開くまで興味津々。

派手な衣装の司会者とクマのキャラクターがまずステージに現れ、話術と着ぐるみのかわいさでお客さんの期待を高めていきます。

やはりサーカスの花形は空中ブランコで、青いきらびやかな衣装の女性が華麗に宙を舞い、技が決まるたびに歓声と拍手が起こりました。同じ空中曲芸でも、天井から下がった大きな赤い一本のリボンにつかまって、命綱なしで時に身体をリボンに絡ませたり、危なげなポーズをとったりしながら登っていくタトゥーも鮮やかな屈強な男性の演技に、息を詰めてステージを見守り、緊張感でいっぱいのシーンが続きました。

フラフープを使った技やバランス芸など多彩な演目の合間には、ピエロが登場し、舞台上に張られたワイヤーの上で曲芸を披露し、わざと？の失敗でどっと笑いが起こったり、客席を巨大なバルーンを転がして駆け回ったり、お客さんとやりとりするコーナーもあって、公演終了後のインタビューでもたいへん喜ばれていました。

夏休みのイベントで子どもが多い中、お年寄りの姿も多くあり、娯楽の少なかった幼い頃のイメージや、サーカスにある種の郷愁を感じる世代なのだろうかと思わせられました。

（入場者数　四六〇名　二回公演）

高知市立中央公民館事業　2018年 秋冬の市民講座

プラモデル組立教室（ガンダム編）～4回の講座で2体のガンプラを作ります!～

この講座では初代ガンダムのシリーズに登場する機体から2体を選び、プラモデルの組立をしていき、最後に簡単なスミ入れ塗装を行います。プラモデルに興味がある方、ガンダムに興味がある方、男性、女性問いません。皆さんがプラモデル作りの基礎を覚えて、作りたいプラモデルを自由に作れるようにサポートをさせていただきます！【講師：モデルショップヨシオカ店長　吉岡秀高】

日時：2018年11月10日、11月17日、11月24日、12月1日　全４回　毎週土曜日　10:00～12:00
会場：高知市文化プラザかるぽーと10階　彫塑・陶芸室
受講料：2,000円
材料費：2,000円（４回分）

※受講料は8階事務室にて前納、材料費は初回講義日に会場にてお支払いください。
※材料準備の都合上、開講日直近になっての取り消しやご連絡のない欠席の場合は、材料費をお支払いいただく場合があります。
※プラモデル製作に必要な工具等は主催者でご用意致します。

高知を撮る

第34回写真コンテスト入賞作品　**負けてません！しかめっ面**（平成29年10月30日　梼原町三嶋神社）**濱本　秀雄**

梼原町の津野山神楽。鬼に抱かれた赤ちゃんの顔が…。鬼に負けてないしかめっ面が面白い。

限界集落と芸術

風俗歳時記

自然や街並みなど地域資源を活かし、住民が主体となって取り組む芸術文化活動・高知アートプロジェクト（以下ＫＡＰ）が始動して三年。今年度も十五の芸術文化活動が各地域で行われている。その中で唯一、三年連続ＫＡＰに採択された事業がある。四国山地の懐に抱かれた大豊町の八畝（ようね）という限界集落で、演劇とジビエを楽しむオータムフェスタである。

高知市から、当日のみ運行されるバスに乗り約一時間半かけて八畝へ。棚田が広がり、空との距離を近く感じる集落は、高知市民にとっては別世界。県内の山間部に点在する限界集落の一つだが、ＫＡＰの日には演劇好き、ジビエ好きの人が県内外から訪れる。地域の人たちが育て収穫した野菜や、狩猟で射止めたシカやイノシシを肴に、地キビで作った焼酎を酌み交わす。山間部ならではの珍味を味わう前後に、演劇を楽しむ。野外ステージでは、背景の棚田が、ホールで言うホリゾント幕のように役者さんたちを引き立てていた。

ＫＡＰの八畝のイベントは年一回だが、高知大学のボランティアの学生さんが、定期的にこの地域を訪れ、耕作放棄地で地キビ作ったり、日本一のシャクヤク畑を目指してシャクヤクの世話をしたりして、住民との交流を深めている。そこへ芝居という要素を、志を持った劇団が企画し、学生たちと一緒に盛り上げている。

学生も、「山奥で植物の世話をすることだったら、他の県や地域にもあると思うが、演劇もコラボしているのは全国的にも珍しい。いい経験です」と微笑みながら、この日も率先して手伝っていた。

芸術文化は、贅沢品のような扱いにされがちだが、私は常に、産業振興や地域の活性化、心の豊かさにつながる必需品だと思っている。

「限界集落に芸術や文化を仕掛ける」こんな仕掛け人が増えれば、地域が元気になる突破口が見いだせるのではないだろうか。

（立花香）

2018市民学校　年末特別教室

クリスマスやお正月をより楽しむことをテーマに、この季節ならではの４つの講座を開催します。

○**布花でつくるクリスマスアクセ**
12月15日(土) 10:00～12:30

○**ほっこり☆サンタのキャンドルリース**
12月16日(日) 10:00～12:30

○**お正月の着付け**
12月12日・19日(水) 13:30～15:30 (全2回)

○**冬至とお正月の韓国料理**
12月22日(土)　10:30～13:00

【お申し込み・お問い合わせ】
2018年11月10日(土)午前10時より高知市文化プラザかるぽーと８階で直接受付を行います。
16歳以上で市内在住または在勤の方対象。
お申し込みの際に受講料(着物の着付け900円　その他500円)を前納してください。(材料費が別途必要です。講座当日に教室でお支払いください。)
※10日(土)に定員に達しなかった場合は、翌11月11日(日)午前８時30分より電話でも受け付けます。
〒780-8529 高知市九反田2-1 TEL 088-883-5071
高知市文化振興事業団「市民学校　年末特別教室」係

高知市立中央公民館事業

平成三十年度 市民学校作品展

市民学校で学んだ受講生と講師の先生方による手作りの作品展です。お互いに励まし合い、楽しみながら作り上げた、たくさんの作品を展示します。ぜひご来場ください。

【出品予定作品】油絵、絵手紙、銀粘土クラフトジュエリー、組紐、竹細工、陶芸、日本画、パッチワーク・キルト、フランス刺しゅう「戸塚刺しゅう」、洋裁、和紙ちぎり絵

日　時：二〇一八年十二月十一日(火)～十六日(日)　十時～十八時(ただし、最終日は十六時まで)
場　所：高知市文化プラザかるぽーと七階　市民ギャラリー第一展示室
入場料：無料

主　　催：高知市教育委員会、高知市文化振興事業団
お問い合わせ：高知市文化振興事業団　〇八八ー八八三ー五〇七一

今号の表紙

「すっかり秋ですね。」
中田　隆也

秋をテーマにどんぐりやイチョウをたくさん描いて、しんぶるで可愛い作品に仕上げました。
そして、冬眠に備えるために食べ物を求め、どんぐり（食べ物）を見つけたうれしさと、秋にめぐりあえた２つのうれしさでとてもよろこんでいるクマの様子を描きました。

（なかた　たかや／
国際デザイン・ビューティカレッジ２年生）

風伯

時代が変わる

数日前、通販サイトAmazonの進展で千趣会が大量のリストラを出したというニュースが流れた。一つの時代が終わり新しい時代に変わり始めているのだろう。数え切れないほどの汚職や粉飾決算、データの改ざんなど、既に始まっている新しい時代に対応できない古い世代が洗い出されているのではないかと思う。この数年で世界、そして日本も、これまでの価値観や感覚が通用しない、時代の大きな変化が押し寄せているのを感じる。

既存メディアが重要な部分の真実を報道できなくなって、それに替わる情報発信がいまものすごい勢いで普及している。ニュース番組さえ冗長なテレビに替わって、YouTubeがより専門性が高く有益で幅広い情報を伝えている。YouTubeのパートナープログラムによって高収益がもたらされるユーチューバーたちの、自分の持てる知識、身体と人生をかけた映像が、面白くないわけはない。最近のテレビモニターはYouTubeの動画も見られる。新聞に替わってさまざまなその道の専門家によるブログサイトがネット上に溢れている。確かに玉石混淆の情報が溢れてはいるが、受け取る側のフィルターさえシッカリしていれば、これほど有益な情報源はない。

こうした新しい情報発信が既存メディアの広告収入を侵食し始め、YouTubeの母体であるGoogleの広告収入でさえ、奪いは始めているそうだから、なんとも皮肉な話である。広告が命の既存メディアにとっては、死活問題であろう。いま世の中を動かしている世代に次の世代が取って代わると、今の世の中はすっかり変わっているように思える。

（霖）

文化高知 No.206 2018年（平成30年）11月1日発行 【隔月発行】

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

2018 高知のまんがあれこれ展＆高新まんが道場30年記念展

2018.10.13土～11.25日 入場無料

場　所●横山隆一記念まんが館企画展示室　　時　間●9：00～18：00
休館日●月曜日、10月27日（土）15：00～18：00、10月28日（日）

上段左より
第29回黒潮マンガ大賞　大賞作品「フミキルシカク」内田竜嗣
「出陣★昆虫武将チョウソカベ！」©森田将文/秋田書店
「高知インディーズマガジン」第22号表紙　イラスト：キタオカミツル
第27回全国高等学校漫画選手権大会優勝作品　テーマ「永久機関」高知市立高知商業高等学校
下段左より
第257回入選作品「虹」浜田昇平、第295回入選作品「同じドロ穴のドジョウ内閣」佐藤慎二
第301回入選作品「ほうし」日和まなみ、第355回入選作品「ワカモンゲット！」かしま山

高知のまんが文化、最新情報発信！

関連イベント　詳細・申込方法については裏面またはホームページを参照

くさか里樹の“みんな、まんがを描いてみん？”

高新まんが道場の２代目道場主・くさか里樹さんが
まんがの描き方をレクチャーします！
開催日●10月14日（日）13：30～15：00

会場内にて
★村岡マサヒロの４コマ目を考えよう！
★高新まんが道場に応募しよう！のコーナーを開設。
あなたも投稿してみませんか！？

お問い合せ
〒780-8529 高知市九反田2-1
高知市文化プラザかるぽーと内
横山隆一記念まんが館
TEL088-883-5029
FAX088-883-5049
URL:http://kfca.jp/mangakan/
E-mail:mangakan@kfca.jp

横山隆一記念 まんが館 YOKOYAMA MEMORIAL MANGA MUSEUM

主催　公益財団法人高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館、高知新聞社　　協力　高知市、高知県、まんが王国・土佐推進協議会、高知インディーズマガジン編集部、タマリン館、森田将文、秋田書店
後援　NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、朝日新聞高知総局、読売新聞高知支局